

Guhyaṃāṇītilaka におけるシヴァとインドラ に対する調伏の差異

徳 重 弘 志

1. はじめに

Guhyaṃāṇītilaka* とは、7世紀後半から8世紀初頭頃にインドで成立した密教經典である。本經典は、チベット語訳 (D 493, P 125) のみが現存しており、注釈書の存在は確認されていない。また、本經典は、広義の『金剛頂經』と呼ばれる經典群¹⁾ に属している。この經典群のうち、『理趣広經』、『真実撰經』、『金剛頂タントラ』、Guhyaṃāṇītilaka* という四種類の經典には、シヴァに対する調伏を中心とした「降三世明王の諸天調伏譚」が共通して説かれている²⁾。

先行研究では、この調伏譚が存在することを根拠として、中期密教經典を奉じた密教僧たちがヒンドゥー教のシヴァ派 (Śaiva) に対する強烈な敵愾心を抱いていることが指摘されてきた³⁾。また、『金剛頂タントラ』では、『真実撰經』の段階では見られない「五人の三界の主」(シヴァ、ヴィシュヌ、インドラ、スカンダ、ブラフマー)⁴⁾ が降三世明王と戦う場面が追記されており、当時の密教僧たちのヒンドゥー教との対立的な姿勢を窺い知ることができる。

さて、**Guhyaṃāṇītilaka* は、他の三種類の經典よりも時代的に遅れて成立しており、内容的にも増広が行われている⁵⁾。しかし、同經典における「降三世明王の諸天調伏譚」に関しては、先行研究では等閑に付されてきた。そこで、本經典における当該箇所を調査したところ、「シヴァが調伏される場面」のみならず、同系統の經典には見られない「インドラが調伏を免れる場面」も記されていることが判明した。

本稿では、**Guhyaṃāṇītilaka* における「シヴァが調伏される場面」と「インドラが調伏を免れる場面」とを比較することにより、ヒンドゥー教の神々が密教僧たちに許容される条件の特定を試みた。

2. Guhyaṃāṇītilaka における「降三世明王の諸天調伏譚」の概要

*Guhyaṃāṇītilaka は、全五章⁶⁾ から構成されている。本稿で扱う「降三世明王の諸天調伏譚」(D ff.137v6–144r2, P ff.99r4–106r3) は、それらの内の第三章⁷⁾ に含まれている。その概要は、以下の通りである。

【1】金剛手菩薩がヴァジュラフーンカーラ (rDo rje hūṃ mdzad, *Vajrahūṃkāra。以下、降三世明王) に変身し、ヒンドゥー教の神々を調伏する。(D ff.137v6–139r3, P ff.99r4–100v3)

【2】シヴァは、降三世明王に反抗するが眷属が全滅したので、后であるウマーと共に鉄の壁の中に逃げ込む。降三世明王が鉄の壁を破壊すると、シヴァとウマーは糞尿でできた不浄な壁の中に逃走する⁸⁾。最終的に、降三世明王がシヴァとウマーを捕獲して、両者を踏みつける。(D ff.139r3–140r7, P ff.100v3–102r3)

【3】降三世明王が、反抗的なシヴァを武器で打ち殺す。それを見たウマーが、降三世明王に服従すると申し出る。降三世明王はシヴァを復活させて、ウマーを献上するなら解放するという条件を出す。シヴァはその要求を承諾し、降三世明王から解放される。(D ff.140r7–141r3, P ff.102r3–v8)

【4】シヴァはマンダラに入った後に、大毘盧遮那如来から各種の灌頂を授かり、「灰自在如来」(Thal ba'i dbang phyug, *Bhasmeśvara[nirghoṣa]⁹⁾) となる。(D f.141r3–7, P ff.102v8–103r4)

【5】灰自在如来が、師のための礼物として、金剛手菩薩にウマーを献上する。その後、金剛手菩薩が、大毘盧遮那如来にウマーを献上する。(D ff.141r7–142r5, P ff.103r4–104r4)

【6】ウマーは、大毘盧遮那如来から各種の灌頂を授かり、「金剛舞菩薩」(rDo rje gar ma, *Vajranṛtyā) となる。(D ff.142r5–v4, P ff.104r4–v3)

【7】インドラが、眷属を伴って来臨する。金剛手菩薩は、シヴァの場合と同様にインドラを調伏しようとするが、大毘盧遮那如来によって制止される。(D ff.142v4–143r2, P ff.104v3–105r1)

【8】インドラが、大毘盧遮那如来に自発的に帰依してマンダラに入る。その後、インドラは、師のための礼物として、大毘盧遮那如来に自身の后(インドラニー)¹⁰⁾ を献上する。(D f.143r2–7, P f.105r1–8)

【9】インドラニーは、大毘盧遮那如来から各種の灌頂を授かり、「金剛嬉喜

薩」(rDo rje sgeg mo, *Vajralāsyā) となる。(D ff.143r7-v2, P ff.105r8-v3)

【10】インドラが、大毘盧遮那如来に他の礼物を献上するために、軍勢と共に再び来臨する。金剛手菩薩は、インドラをマーラ (bDud sdig can, *Māra) と誤認して再び調伏しようとするが、大毘盧遮那如来によって制止される。(D f.143v3-6, P f.105v3-7)

【11】インドラが、大毘盧遮那如来に他の礼物を献上してから、再びマンダラに入る。続いて、他の神々や声聞乗の者たちもやって来て、大毘盧遮那如来を供養してからマンダラに入る。(D ff.143v6-144r2, P ff.105v7-106r3)

3. シヴァとインドラに対する調伏の差異

**Guhyamañitilaka* における「降三世明王の諸天調伏譚」(【1】～【11】)は、シヴァとウマーに対する対応(【2】～【6】)と、インドラとインドラニーに対する対応(【7】～【11】)とが主題となっている。また、この調伏譚では、【2】におけるシヴァに対する対応と、【7】と【10】におけるインドラに対する対応とが、対比的に描写されている。

まず、【2】における降三世明王(金剛手菩薩)のシヴァに対する対応について確認する。

de nas byang chub sems dpa' lag na rdo rje khro ba dang bcas pa'i gdong pas rdo rje hūṃ mdzad kyi sku nyi ma bye ba stong phrag bcu gnyis kyi snang ba dang mtshungs pa | chu gter chen po'i sgra sgroḡ¹¹ pa | jig pa'i dus kyi rlung gis dkrugs pa ltar nam mkha'i khams thams cad khyab pa'i khro bo chen po'i skur gyur te | bcom ldan 'das kyi spyen sngar gnas nas 'di skad ces gsol to ||

bcom ldan 'das gdug pa can gyi sems can 'jig rten gsum gyi bdag por gnas pa 'di | rdo rje 'bar ba 'dis 'khor dang bcas pa'i lus thams cad bsreg par bgyi'o || (D ff.139r6-v1, P ff.100v7-101r2)

このように【2】では、金剛手菩薩が降三世明王(ヴァジュラフーンカーラ)に変身し、燃え盛る金剛杵によってシヴァを調伏すると宣言している。なお、当該箇所における降三世明王のシヴァに対する対応は、『金剛頂經』系統に属する他の經典と共通するものであるため、この經典群においてはシヴァが調伏を免れることは一度も無い。

次に、【7】における金剛手菩薩と大毘盧遮那如来のインドラに対する対応について確認する。

de nas phyag na rdo rje bsnayems¹² pa dang bcas pas rdo rje gsor zhing shin tu¹³ khros te | bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to ||

bcom ldan 'das rdo rje kun tu¹⁴ 'bar rab tu 'bar ba 'dis de'i stobs gzhom par bgyi'o ||
 de nas¹⁵ bcom ldan 'das kyis lag na rdo rje la bka' ssa pa |
 lag na rdo rje 'di ni mi mthun par 'dzin pa'i sems kyis ma 'ongs kyis | des na¹⁶ khyod de ltar ma
 byed cig | (D ff.142v7–143r2, P ff.104v7–105r1)

このように【7】では、金剛手菩薩が燃え盛る金剛杵によってインドラを調伏しようとするが、大毘盧遮那如来に制止されている。また、当該箇所では、インドラを調伏すべきではない理由として、「〔世尊に〕随順しない (mi mthun par 'dzin pa, *apradakṣiṇagrāhin) 心でやって来たのではない」こと、換言すれば、「世尊に〕随順する心でやって来たことが挙げられている。

最後に、【10】における金剛手菩薩と大毘盧遮那如来のインドラに対する対応について確認する。

de nas phyag na rdo rje rab tu khros te rdo rje gsor zhing |
 bcom ldan 'das ci phrag dog gi sems kyis 'ongs na rdo rje 'dis de dag bsreg par¹⁷ bgyi'o ||
 de nas bcom ldan 'das kyis lag na rdo rje la bka' ssa pa |
 lag na rdo rje de ltar ma byed cig | bla ma'i yon gzhan yang dbul ba'i phyir lhags pa yin no ||
 (D f.143v5–6, P f.105v6–7)

このように【10】でも、【7】の場合と同様に金剛手菩薩がインドラを調伏しようとするが、大毘盧遮那如来に制止されている。また、当該箇所では、インドラを調伏すべきではない理由として、「師のための礼物」を献上するためにやって来たことが挙げられている。

4. おわりに

本稿では、中期密教経典である **Guhyaṃaṇṭilaka* における「降三世明王の諸天調伏譚」を対象として、シヴァとインドラに対する対応の差異について調査を行った。同経典には、『金剛頂経』系統に属する他の経典とは異なり、インドラが降三世明王による調伏を免れる場面が描かれている。同経典の記述に従えば、インドラが調伏の対象ではない理由は、「〔世尊に〕随順する心」で「師のための礼物」を献上するためにやって来たからである。また、『金剛頂経』系統の経典では、シヴァでさえも世尊に帰依することで許され、最終的には如来になっている。つまり、ヒンドゥー教の神々が密教僧たちに許容される条件は、世尊に対して恭順の意を示していることだと判断することができる。このことは、当時の密教徒のヒンドゥー教徒に対する姿勢にも関連していると推察される。

- 1) 当該の經典群の梗概を伝える文献は、不空 (705-774) が翻訳あるいは撰述した『十八会指帰』(T 869) のみである。それらの經典に関する情報は、徳重 [2018b, 90(11) n. 5] で言及しているため、本稿では經典名のみを列記する。①『真實撰經』, ②・③『金剛頂タントラ』, ④『降三世大儀軌王』, ⑤不明, ⑥・⑦・⑧『理趣広経』, ⑨『サマーヨーガ・タントラ』, ⑩不明, ⑪ **Guhyaṃaṇṭilaka*, ⑫不明, ⑬『秘密三昧大教王経』, ⑭不明, ⑮『秘密集会タントラ』, ⑯『無二平等勝タントラ』, ⑰未確定 (『所得等虚空タントラ』と対応するという説が存在する), ⑱不明。なお、徳重2018bの時点では、⑨のサンスクリット校訂本 (NEGI 2018) は刊行されておらず、⑯のサンスクリット校訂本 (范2011) については存在を見落としていた。
- 2) 先述した『金剛頂経』系統の經典のうち、①, ②・③, ④, ⑥・⑦・⑧, ⑪, ⑬が中期密教經典に分類される。これらの經典はいずれも「降三世明王」に言及しているが、「降三世明王がシヴァとウマーを踏みつける場面」などを詳細に扱っているのは、①, ②・③, ⑥・⑦・⑧, ⑪という四種類の經典のみである。なお、管見のおよぶ限りでは、それらの四種類の經典は、⑥・⑦・⑧→①→②・③→⑪という順序で内容が増広されているため、同様の順序で成立したと推定できる。
- 3) 初期密教經典においては、シヴァの扱われ方が一定していない。詳細については、藤井2015を参照。
- 4) Cf. 北村・タントラ仏教研究会 [2012, 289-290 vv.34-41; 298 vv.133-141].
- 5) Cf. 徳重2019.
- 6) Cf. 徳重 [2017, 53-54], 徳重 [2018b, 90(11)-89(12) n. 8].
- 7) **Guhyaṃaṇṭilaka* の第三章は、(1) 降三世マンダラ, (2) 母天たちの母音のマンダラ, (3) 降三世明王の諸天調伏譚, (4) マハーマーヤーの明呪と修法, (5) 五相成身觀, という内容から構成されている。これらのうち、(4) に関しては徳重2018aを、(5) に関しては徳重2019を、それぞれ参照されたい。
- 8) 関連する説話が、『底哩三昧耶経』(T 1201, 21: 13c21-14a15) にも説かれている (概要については、田中 [2010, 69] を参照)。同經典には、(1) 不動明王が不浄な壁の中に住するシヴァとウマーを捕獲する場面, (2) 不動明王がシヴァとウマーを踏みつける場面, (3) 不動明王に調伏されたシヴァが灰欲世界に転生して日月勝如来となる場面, といった特徴的な場面が説かれているが、これらのうちの (1) は **Guhyaṃaṇṭilaka* における当該箇所と近似している。なお、藤井明氏 (東洋大学大学院) によれば、『底哩三昧耶経』における当該箇所はサンスクリット原典には存在せず、『大日経疏』(T 1796) に基づいて増広された部分とのことである。この指摘を踏まえると、(1) の場面は『金剛頂経』系統の經典の中でも **Guhyaṃaṇṭilaka* にしか存在しないため、『大日経疏』を講述した善無畏 (637-735) が、**Guhyaṃaṇṭilaka* における調伏譚を翻案して『大日経疏』の一節を作成した可能性が存在する。この推測が妥当であるならば、**Guhyaṃaṇṭilaka* の成立年代は、善無畏が長安に到着した開元四 (716) 年よりも前であるということになる。
- 9) 『真實撰經』(堀内 [1983, 349 §732]) を参照した上で、想定されるサンスクリット語を提示した。
- 10) **Guhyaṃaṇṭilaka* の当該箇所においては、献上される対象について mdzes ma (美しい女) と記されるのみで、具体的な名称や、インドラとの関係については不明である。ただし、同經典では、シヴァとインドラとが対比的に描写されているため、シヴァが后 (ウマー) を献上するのであれば、インドラが献上するの后 (インドラニー／シャチー) であると推定できる。なお、同經典では、mdzes ma という語句が、シヴァの後であるウマーを指す場合にも幾度か用いられており、この事実も上記の推定を補強する材

料となり得る。

- 11) *sgrog*] em.; *sgrogs* D P
- 12) *bsnyems*] conj.; *sn̄yems* D P
- 13) *tu*] D; *du* P
- 14) *tu*] D; *du* P
- 15) *de nas*] D; om. P
- 16) *des na*] D; *de nas* P
- 17) *par*] P; *phar* D

〈一次文献〉

Advayasamatāvijaya-tantra. 范慕尤編『梵文写本《无二平等经》的对勘与研究』梵文贝叶经与佛教文献系列丛书2, 中西書局, 2011.
Sarvabuddhasamāyoga-tantra. Ed. Ṭhākurasena NEGĪ. *Dhīh*, vol. 58. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2018: 141–201.

〈二次文献〉

北村太道・タントラ仏教研究会2012『全訳 金剛頂大秘密瑜伽タントラ』起心書房。
田中公明 2010『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社。
徳重弘志 2016『『金剛頂経』第十一会について』『印仏研』65(1): 370(155)–365(160).
—— 2017『『金剛頂経』第二・三会と第十一会の関連性について』『密教学研究』49: 51–63.
—— 2018a『*Guhyaṃaṇṭilaka* におけるマハーマーヤーについて——第三章の校訂テキストおよび和訳——』『高野山大学大学院紀要』17: 35–58.
—— 2018b『*Guhyaṃaṇṭilaka* における「四種法」について——第四章の校訂テキストおよび和訳——』『高野山大学密教文化研究所紀要』31: 100(1)–83(18).
—— 2019『*Guhyaṃaṇṭilaka* 第三章における五相成身観について』『密教学研究』51: 89–100.
藤井明 2015『インド初期密教と他宗教との関わり——特に大自在天の記述を中心に——』『東洋大学大学院紀要』52: 191–214.
堀内寛仁 1983『初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇 (上)』密教文化研究所。

〈キーワード〉 *Guhyaṃaṇṭilaka*, 降三世明王, シヴァ, インドラ, 『十八会指帰』
(高野山大学密教文化研究所専任研究員, 博士 (密教学))